



作曲家の生活

日本人の作曲家による子供のピアノ曲もだんだんよい作品に恵まれつつあることは、誠によるこぼしいことである。しかしそれを教材としていかに生かすかという段になると、まだまだうとい感がないでもない。作曲家が身近かにいるこの幸を生かし、ピアノ指導者は一層の研究をなされなければならないと思う。

12月7日(月)におこなわれる、第8回〈東音〉ピアノ教材研究 奥村 一作曲「子供の広場」に先立ち、作曲家奥村一先生をお訪ねした。

——先生の「子供の広場」は、一曲づつになんとも可愛らしい曲名がついていて、ほのぼのとした感じがしますね。

奥村 はあ、匯摩さんの詩がいいですね。そしてこの曲は一つづつが練習曲になっていましてね、ピアノテクニックが高まるようになっていきます。やさしいのから順に並んでいるわけではありませんが、ピアノを教えておられる先生方が、その指導の目的に応じて選曲していただけたら幸いです。

まあこの曲は、子供さんが初見で弾くというようなものでなく、じっくりと取り組んでいただきたいと思いません。

——この怪物という曲、子供はよろこびますよ。

奥村 そうですか。大人が弾いていていつも問題になるのが、この曲だったんですよ。どうやって弾くのかって。これはよいことを伺いました。

——子供というのは、大人より新しい感覚に素直についてくるようですね。だからピアノの教師が、自分が学んだことのわく内で、ものを考えたり教材を選んではいけないということですよ。

先生が、何しろ全曲弾いて聞かせて、子供たちの感想を聞くなんていうことも必要だと思うのです。ところで先生の子供時代について伺いたいのですが。

奥村 両親が全くの素人だったものですから上野にあった児童音楽学園に通わされましたね。

——先生は絶対音感を持っていらっしゃるんですよね。それは小さい時からピアノを学んでいたということですか。

奥村 児童学園で、伊藤武雄先生から音感教育を受けたのです。今桐朋の音楽教室でやっている教育、あれを僕たち受けたのです。ただ今と違うところは、プロ志望の子供たちばかり集っていたのではなくて、一般の子供たちもいたということです。

楽しかったですよ。伊藤先生なんか、できない子には、「これはむずかしいぞ」なんていって〈C・E・G〉なんか弾いておられる。僕らなんかには、黒鍵ばかりの和

音をあてさせたりしてましてね。そしてこれほど目をつけた子には、徹底的に教育していただきました。だけどみんな子供同志仲良く、のんびりしていましたよ。

——子供たちをきずつけず、本当に理想的な教育ですね。競争意識やエリート意識を増長させるような雰囲気では、情操教育にはなりませんよ。ピアノは永井進先生につかれたのですか。

奥村 はい始めから永井進先生。その頃永井先生は研究科におられましたね、子供に教える暇も惜しんでよく練習しておられました。今でも覚えているのですけれどもラフマニノフの二番コンチェルト、プロコフィエフの三番コンチェルト、リストの「ソナタ」等弾いておられた様です。

——奥村先生は子供で、そんなむずかしい曲知っていたのですか。

奥村 ええ勿論、レコードで知っていました。早くあんな曲弾きたいなあと思いながら聞いていました。

——児童学園の高等科という戦争中になりますね。

奥村 正にその通りでとにかく大変でしたよ。よく音楽なんて出来たものだと思ながら感心する位です。何しろ野外教練というのがありまして、その時はにぎりめしとベートーヴェンのソナタ集の厚いのをふるしきで背中にしょって行き教官にどやされ、その足でピアノのレッスンに行くのですから……

汗の臭さと銃の油のおう教練服を着て、時には三八式の鉄砲まで持ってピアノを習うんですから、永井先生も閉口なされたと思いますよ。もうこんなことは、今の人達には絶対にさせたくないですね。

——それでいつ頃から作曲家になろうと考えていたのですか。

奥村 永井先生のお弟子の中で僕なんかきつと劣等生だったのではないかと思うのですけれど、ピアノをじっくり練習するというようなタイプではなかったわけです。楽譜を見てそれをすぐ音にする、さあと弾いてしまうのが得意だったもので。それに子供にしては初見がききましたね。

8才の時、ワルツを作曲したのが生れて初めての作品です。楽譜の書き方も何も知りませんから、各段に四分の三拍子だなんて書いたりしましてね。

それから音楽学校へ進むかという頃になって、永井進先生が「なあに作曲科はやさしいよ」とおっしゃるもので細川碧先生に師事したわけですよ。そうしたら作曲科を受けるまでになるには、5年かかるよといわれたんですよ。

楽典なんか児童学園の高等科でさんざんやっていたのに楽典から始めるというのです。そりゃこわいレッスンでした。突然「ギド・ダレッツォとは？」とおっしゃる。そんなこといわれたってわかりゃしませんよね。拍子記号とは尋ねてくだされば誰だってわかりますけど。

—— 棒暗記ということですか。古い形態の教育ですね。丸暗記なんて音楽の本質とどう関係あるのですか。奥村 それが、それだけの知能と綿密性がなければ作曲家にはなれないというのですね。ハハハ……

音階とは、と問われれば、西洋音階のギリシャ音階から東洋のミ・越・斯・金・平・調に至るまで、音階と名のつくものすべていわなければいけないんですよ。そして一言でもまちがえれば、爆弾が落ちるんですから。

—— そして上野の作曲科にはいて、信時潔、橋本国彦、伊福部昭らにおつきになったわけですね。先生と同年輩の作曲家の中にはどういふ方がいらしゃいましたか。

奥村 一級上に、団伊玖磨さん、大中 恩さんがおられます。同級生は斎藤高順君、芥川也寸志君、依田光正君です。二年下には矢代秋雄君、黛敏郎君という所です。

—— ところで、作曲するという事は、どういふプロセスで創造されるのでしょうか。

奥村 作曲というのは構成ですから、ある楽想が浮んでさっとオーケストラの曲ができあがるなんていうのは、それこそ音楽映画のお話なんですよ。

—— でも主題を作る時は、インスピレーションでしょう？

奥村 一番初めはね。しかしその主題を作るにもいろいろと動きを変え練りあげてでき上るものです。それから構成・組み上げていくのが作曲というのでしょうか。勿論その上に感覚的なものが加味されていくわけですよ。

—— 先生は、映画音楽をずいぶん書いていらっしやいますね。映画音楽を書かれた動機というのは、

奥村 研究科時代の師である伊福部先生が、盛んに映画音楽を作っていたらっしやったものですよ。私昭和22年に卒業したのですが、卒業に際して就職の事をお尋ねしたら「まあ先生でもなさるのですね」なんておっしゃるんですよ。でも、伊福部先生御自身でやっていたらっしやるアレがよいと思って、松竹の所長さんを知って

たもので、そこをお願いしてはいったのです。

ところが、すでに松竹専属の作曲家がいて、ずいぶん意地悪されました。

—— 映画音楽というのは、だいたいオーケストラ曲ですよ。それをどうやって作るわけですか。

奥村 ええ、当時はハーブも含めて50人以上ものオーケストラ団員がいてね。自分が作ったものをすぐ試みられて、そりゃ面白かったですし、それがとてもためになっているのです。一つの映画に、シンフォニー曲位の分量の楽曲が必要なんです。映画は一つで約二時間以上ですものね。それを二日間位で作曲してしまうのですよ。まったく無茶な話で、今だからお話できるのですが、当時は依頼されると、「ハイ間にあります」といって、徹夜で書き上げて持って行くなんていう軽技をやっていたのです。

つい最近外国からの依頼で、ピアノトリオを一週間書き上げて送ってあげたのですけれど、この時鍛えた技なんですよ。

—— 映画ができ上がったのを観てから作りはじめるのですものね。

奥村 ええ、途中で見せてくれるのですけれど、この後にこういう場面が来ますと説明されたって、できあがって観ないことには、想像だけではわかりませんよ。第一フィルムの尺数すなわち Time が正確につかめない。自分でストップウォッチを持っていて、何秒して自分の感受性で得たものの外に監督さんの注文に合わせて作曲するわけですよ。

映画音楽で一番大切なのは、トップタイトル、途中のクライマックス、そしてラスト、この三つです。ですから始めにこの三ヶ所のところを先に作曲してしまうのです。

—— 先生が作曲された映画にはずいぶん名画がありますね。「本日休診」これなんか当時センセーションをおこしたのではなかったでしょうか。それから「現代人」もあと「煎餅」なんかも優れた作品ですね。

映画音楽を除けば、やっぱりピアノ曲が多いのですか。

奥村 そうですね。あと管楽器の曲もあります。弦の曲がちょっと少ないですね。

—— 先生のピアノ曲は、随分出版されていますね。私の知る所では、日本での出版冊数では最も多い作曲家のお一人だと思います。

奥村 さあどうですか。この間外国から送って来た出版目録を見ていましたら、松平頼則さんの曲がずい分で見えているのです。外国では

—— ところで、作曲家の生活を支えるものは、それらの印税とか、依頼料とか……。

奥村 まあそうですね。それだけでは普通食べていけませんよね。だから先生をしたり。

—— 古今を通じて作曲家というものは、貧しいのがあたりまえで、例外的にメンデルスゾーンなんかいますけれど、ベートーベンにしる、シューベルトにしる。

日本においても例外ではない。お金がありそうだな——本当はどうかわかりませんが——と思われる作曲家たちは、作曲というお仕事以外に、サイドワークを持っていらっしゃる方々、例えば、テレビのタレントとか。

ところで、奥村先生は、「先生」もしていらっしゃるのではありませんか。

奥村 ええそうなんです。作曲家が椅子に腰かけてぼーとしていても、それは決して本当に何もしていないのではなくて、頭の中では楽想を練っているのですよ。

そういう時に、教えている生徒さんがレッスンなんかに来られれば、自分の仕事を中断せねばならないでしょう。それが困るんです。

—— 先生がもし作曲家になっていなかったとしたら、勿論先生は作曲家になるべくしてお生れになったのでしょうけれど、先生はピアニストとしても名をなしていたでしょうね。先生のピアノがお上手だということは、よく衆知のことですよ。

奥村 それはどうも。……とんでもない……。

この間、リヒテルを聞いて来ました。やっぱりすばらしいですね。

テレビとかレコードでは、あの本ものの味は絶対にかからない。

二階の手のよく見える座席と、ベダリングのよく見える下のかぶりつきの所で、見たのですけれど、ベダリングのすばらしいこと。

あのこの前の会の時お話しした（記者註第5回〈東音〉

ピアノセミナーの折、御指導くださったピアノ奏法の歴史について）トレモロペダル、これがまことにすばらしい。普通、かかとを床につけてペダルを踏みますよね。それが、かかともつけず、微動させているとってよい位に細かなペダルをつけるのです。あれは普通の人ではできないのではないですか。

それから〈f〉と〈p〉の分量のバランス、実に見事に配分されているのです。本当にすばらしかった。

リヒテルのあとソコロフを聞きに行きました。この時は、こちらのテクニック（指で弾くまねをする）に感心して帰って来ました。

—— ソコロフは確か20才？ 若いからテクニシャンなんですね。奥村先生は、作曲家にしては随分ピアノの演奏会を聴きにいらっしゃるのですね。

奥村 ええ、ことに外国から来た一流のピアニストの会には行くようにしています。

—— 奥様もピアニストでいらっしゃいましたね。

奥村 ハア、昔の奈良洋子です。今は桐朋で教えております。戦争中は井口先生門下、終戦後は安川先生に師事していました

—— 奈良洋子さんはコンクールでも優秀な成績で入賞していらっしゃる優れたピアニストですよ。

今度は、御夫妻でデュエットをぜひお願いしたいものです。

先生とお話をしているとその話題の豊富さに思わず、時のたつのを忘れてしまうほどで、ビールの会の金曜会のこと、その他楽しい一時があったという間に流れてしまった。

このあと今年の5月初演された、モノオペラ「静御前」のテープを拝聴させていただいて、先生のお宅を辞したのである。

「子供の広場」

| | 作曲 詩 | 奥村 薩摩 | 一 忠 |
|--------------|----------------|----------|----------------|
| 着せかえ人形 | むかしむかしのおはなしを | | それから それから |
| あのワンピースにしようか | 耳から心に つめこんで | | スパゲッティ・うちのママふう |
| このセーターにしようか | それから 旅にでる | | |
| まよって | はるかな明日へ | | オルゴール |
| まよって やっと | あたらしい希望といっしょに | | ふたをあけると |
| きまって おでかけ | | | 甘くて やさしい音楽が |
| 着せかえ人形の | スパゲティ | | けむりのように |
| よそ行きドレスを | スパゲッティの名前おぼえたよ | | たちのぼります |
| 買うために | スパゲッティ・ナポリタン | | |
| | スパゲッティ・ミラネーズ | | 子守唄 |
| おとぎばなし | スパゲッティ・ミートボール | | おやすみなさい |

おやすみなさい
ぎんねずみいろのうずまきが
おめめのまわりを
まわります
ゆっくりと
ゆっくりと
ゆっくりと

パパとママ
右と
左の
てぶくる

虹の橋

こちらがわから
あちらがわへ
あちらがわから
こちらがわへ
この世で いったう大切な
うつくしい心が渡る
虹の橋

しゃぼんだま

消える時
虹の花を咲かせる

フルーツ・パーラー

お姉さん
ゆびきりげんまん
お約束
お買ものがすんだら
フランス国旗のパーラーで
プリン・ア・ラ・モード
食べましょう

おせんべ

おせんべは
なんまいたべてもきりが
昔話の味がするから
お祭の匂いがするから

高原の朝

高原では
小鳥が朝を知らせに来る
小鳥は歌で窓をノックしに来る

レーシングカー

おいぬく車
おいぬかれる車
おいかける目
おいぬかれる車
おいぬく車
おいつけない目
……………
うなりの あらそいのなかで
自分のはずむ心の声など
ぼくには もうきこえない
目と耳とをうばわれて

金魚

動く 水中花
泳ぐ カンナのひとひら

バトミントン

トランポリンにのった
十姉妹の
メトロノーム遊び

こねこ

こねこ

ね

ねこ

こ

こね

ねこね

ねここねこがはずむ

こねこがころがる

ボールのように

誕生日

はてしない海を
わたって行く船長のぼくが
一年に一度だけ出会う
ケーキの島

忍者

飛ぶ影
走る影
消える影
？

天井にとまった

黒い蠅

早口言葉

ヒグラシカナカナ

ナカナカナカナイ
ヒグラシカナカナ
ナカナカトレナイ

怪獣

怪獣は いつも
蒙の中にあらわれる
そして
大きな足音をさせて
一歩も進めなくなったぼくに
ちかずいてくる

コンピューター

そのとおくなるほどの
むつかしい答えを
はじき出すために
めまぐるしく働く
はつかねずみのように
神様に近づく人間のために

宇宙遊泳

スロービデオの
三段跳び

サンタ・クロース

ジングルベルが
サンタ・クロースを招くのか
サンタ・クロースが
ジングル・ベルを鳴らすのか
いずれにしても ぼく
ベットに吊した
靴下のように
ながい ながい夜を
楽しみながら 眠ります

花壇

夜の花壇では
花たちが話している
声をひそめて
明日の朝
まっ先にたずねてくる
光のすじのことを
風のしまのことを
蝶のもようのことを

ジェット・コースター

大きな蛇にまたがった
勇気のある ぼく
高い山から谷底へ
高底から高い山へ
上ったり 下ったり
ああ
おなかがかくすぐったい